

チャンクの有効性に着目した文構造理解について

ー 中学校英語における手続き的知識を伴う英語力を目指して ー

学籍番号 189986

氏名 兵庫 多香美

主指導教員 柏木 賀津子

1. 実践研究の背景

第二言語（外国語）を学習する際には第二言語習得理論（Second Language acquisition: SLA）に基づく指導が望まれる。第二言語学習者は大量のインプット（聞く、読むなど）に触れることを通して、必要な言語材料を取捨選択して取り込み、言語形式と意味を繋げ、理解するといったインテイク（内在化）のプロセスをたどる。また豊富なインプットを通すことにより、学習者は言語の特徴に注意を向けるようになり文構造の規則や表現に気づくことができる。その気づきは多くのひとまとまりの文章を蓄積することで起こりやすくなると言われている。これらを踏まえ、英語特有の音とリズムを習得することができるチャンツによってひとまとまりの文章を模倣や繰り返しを通して蓄積し、文構造の規則や表現に注意を向けさせ、文構造への気づきを促すことができる指導方法であるといえる。実習校では文法説明を聞くと難しい様子が見られたが、チャンクによるやりとりはスムーズに行う様子があった。そこで、豊富なインプットとチャンツによる模倣や繰り返しによってひとまとまりの文章を蓄積することによって、文構造への気づきを促す文法指導の効果を検証することを目的とした。

2. 実践研究

2.1 基本学校実習Ⅰ・Ⅱ

基本学校実習Ⅰでは、内容のある英語を豊富に聞かせることを中心にした授業実践を行った。“c all+A+B”の単元で文構造の導入に影絵クイズという意味のある場面を設定した。教師の英語での語り（Teacher Talk）や教師と生徒のやりとりの中で文構造の規則や表現に注意を向けさせるようにした。しかし、教師と生徒という限られたやりとりのみであったことが課題であった。

基本学校実習Ⅱでは、内容のある英語を豊富に聞かせることに加え、教師と生徒、生徒同士のやりとりを中心とした授業実践を行った。“if”構文の単元で文構造の導入に「もしドラえもんがいたら」と意味のある場面を設定した。Teacher Talkで文構造に注意を向けさせ、また、かるたやすごろくなどのアクティビティーを使用し、繰り返し同じ構文を使用した文章をインプットした。アクティビティーによるインプットを増やすことで生徒同士のインプットは増え、文構造の規則や表現により注意を向けやすくなったと考えられる。検証方法は、事後テスト（リーディング）を行い生徒の文構造の規則や表現に気づく力を把握した。また、ワークシートにより文構造の頻出回数も把握した。事後テストの分析結果から、文構造の規則や表現に読んで気づく力が高いことが分かった。しかしワークシートの結果から、構文の頻出回数は多くなかった。この結果より、頻出回数を増やすためにチャンツ部分から借りて表現をできるようにインプットの構造に改善を加える必要がある

ことが分かった。

2.2 発展課題実習 I

発展課題実習 I では、教師と生徒、生徒同士のやりとりを中心にした構造化されたインプットでの授業実践を行った。“to”不定詞の単元で文構造の導入に歴史上の人物クイズという意味のある場面を設けた。他教科を使用することでより内容の豊かなインプットであり、生徒たちは既習事項であるためにより文構造の規則や表現に注意を向けさせやすい。また既習事項を知っている生徒と知らない生徒でのやりとりも増えた。よって、文構造の規則や表現により気づくことができ、文構造の頻出回数も増やすことができたと考えられる。検証方法は、事前テスト（リスニング）と事後ワークシートを行い、文構造への気づきの伸びと気づきとチャンク部分の入れ替え度合いの相関を分析した。事前・事後テストの分析結果より平均点は下がったものの、中間層は高得点層に移動した。また文法正答率が高い生徒ほどチャンク部分の入れ替え度合いは高かった。この結果より、チャンク部分を入れ替えてアウトプットするためには、文構造の気づきが不可欠であることが把握された。

2.3 発展課題実習 II

発展課題実習 II では、文構造の気づきを促しやすくするために視覚的提示を扱った授業実践を行った。“think that”の単元で文構造の導入にだまし絵を用い、やりとりを活発にする場面を設けた。パワーポイントに繰り返し使用した文章を提示し、教師と生徒のやりとりによって文構造の気づきを引き出した。よって、クラス全体に文構造の気づきを明示的に示すことができ、頻出回数も伸びたと考えられる。検証方法は、事前テスト（リスニング）と事後ワークシートを行い、文構造の気づきの伸びとチャンク部分の入れ替え度合いの相関を分析した。事前・事後テストの平均点にわずかな伸びは見られ、また高い文法正答率と文構造の頻出回数には高い相関が見られた（ $r=0.89$ ）。この結果より、チャンク部分の入れ替えには文構造の気づきは必要不可欠であることが再度明らかになった。また、やりとりによって文構造の気づきは促されやすくなったと考える。

3. 総合考察

以上の実践から結論は4点にまとめられる。1) SLAに基づく構造的なインプット、つまり Teacher Talk が必要不可欠である。Teacher Talk は「ドラえもん」や「歴史上人物クイズ」で実践したように生徒がおおまかに理解でき、聞いていて楽しく、言語内容の質が高いものであることが重要である。2) 教師と生徒、生徒同士のやりとりの場면을授業内に取り入れることである。お互いの発話内容から学び合い、文構造の規則や表現の気づきを促すことができる。3) 同じ文構造を用いた文章でやりとりを通して模倣や繰り返しを行うことである。ひとかたまりの表現が蓄積されることで、文構造の気づきを促しやすくなり、何度もまねることにより慣れが生じ、自分なりの意見を加えてアウトプットすることに繋がる。4) 視覚的提示で文構造の気づきを引き出すことである。生徒たちは内容の興味から、英語を聞いたり、真似をしたり、やりとりを行ったりすることで言語形式に注目させることができる。のちに、視覚的に文章を提示することで、文構造の規則や表現の気づきを生徒たちから引き出すことができ、また、明示的に示すことも同時に必要である。今後は、チャンツなどの模倣や繰り返しによってひとかたまりの表現を蓄積し、やりとりや視覚提示によって文構造の規則や表現に気づき、明示的に示すことが、今後の文法指導には求められている。